HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	趣味縁の研究 ： 札幌のOYOYOゼミと前橋〇〇部の事例から［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	加藤, 康子
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(国際広報メディア)
Dissertation Number	甲第13704号
Issue Date	2019-06-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/74990
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Yasuko_Katou_review.pdf, 審査の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（国際広報メディア）　　氏名：加 藤　康 子

審査委員　主査　准教授　田 邉　鉄
副査　教　授　山 田　義 裕
副査　教　授　清水　賢一郎
副査　教　授　敷 田　麻 実（北陸先端科学技術大学）

学位論文題名

趣味縁の研究
～札幌の OYOYO ゼミと前橋〇〇部の事例から～

本論文は、著者が修士課程在学中から多年にわたって継続してきたフィールドワークをもとにした実証研究であるが、単なる事例研究ではなく、対象地域の地価や人々のライフスタイルに関する傾向などのデータを用いた量的検証と、「趣味縁」という概念を軸とした解釈研究を併用し、趣味縁概念の拡張を目指すものである。都市型の文化的な市民活動は、活動を支える周辺環境も含めて、趣味縁概念によって説明できるとし、それを地道なフィールドワークによって実証的に明らかにした点について、審査員から高く評価された。

第 1 章で著者は、現代日本社会における趣味に基づいて取り結ばれる人間関係としての趣味縁が注目されていることの背景と、研究の趣旨を結びつけて述べている。趣味縁は「社会的な有用性や経済価値を離れたところ」に特徴があり、仕事の外にあるからこそ、個人と仕事との関係を見直すきっかけとなったり、遊休不動産の質的変化をもたらしたりすることができる。取り上げられた北海道と群馬の事例について、いずれも趣味縁を契機とした活動でありながら、趣味の内容そのものへの傾注を目的とせず、バラエティに富んだ個人の趣味を披露し、その都度一緒に楽しむプラットフォームとしての機能を果たそうとしている、と指摘している。

第 2 章では、先行研究を整理し、「趣味縁」という言葉の生まれた経緯を述べる。地縁・血縁といった従来型の人間関係が希薄になる一方で、見知らぬ他人に対する一般的信頼に基づく社会とはなりきれない現代日本社会においては、閉鎖集団内にとどまって安心を享受するか、社会的に孤立するしかない。「個人化」がもたらす負荷を軽減し、社会的孤立を緩和するためには「都市的つながり」を拡充する必要がある。ところが日本では「伝統的な人間関係」に対置される形で

設定された「社縁（ゲゼルシャフト）」さえも、拘束性を持つ「選べない縁」となっていることが多い。そこで上野千鶴子がさらに外側に「選択縁」カテゴリを設ける、というアイデアを提示した。趣味縁の源流はそこにある。著者は、これに加えて、幸福が家庭生活に結びつけられていることについて、自己実現や生きがいの内容としては既に家庭よりも趣味が大きくなっていることを指摘した。特に北田暁大(2017)の議論などについて、掘り下げ方が足りず、本論文の意味づけが十全になされていない、という指摘があり、今後さらなる研究の深化をはかるという返答が著者からあった。

第3章は札幌市・大通の「OYOYOゼミ」、第4章は前橋市の「前橋〇〇部」という2つの趣味縁事例のフィールドワークの記録とその分析である。当初、興味のある分野ごとの「部活動」として始まった「OYOYO」は、その後、それぞれの得手を生かした全体でのレクチャーやワークショップ形式の活動へと形を変え、閉鎖的な場から、オープンで多様な趣味の入り混じる場へと変容していった。そのことは、「専門-非専門」という固定的な関係を希薄化させ、「専門外」の人々が趣味の領域で集団に貢献する、専門以外での部分転職（第2のハーフシフト）と呼べるような状況を作った。好きなことでつながっていくという点では前橋〇〇部についても同じような状況が観察されている。

第5章の街中の趣味縁拠点が、「老朽化した不動産があり、改装が難しい」という大家の事情と、「都心部に安く拠点が欲しい」趣味縁集団の事情がマッチしたものである、という指摘は妥当なものである。一方、そこに至る経緯は一様ではなく、暫定利用によって趣味縁が公共的な社会参加に繋がるとはすぐには断じることはできないのでは、という指摘があった。社会学の文脈から趣味縁を論じた浅野智彦による議論では、趣味縁的なものは公共性には繋がらない、とも言っているので、少なくともそれには反論すべきだったと思われる。

第6章は結論であり、本研究で得られた新たな知見を3つ上げている。特に「個別の趣味の深化を目的としないで、趣味をきっかけに繋がることが目的の趣味縁集団」に着目し、社会学等の「居場所」（サロン）と結びつけて論じた点については、著者の優れた独創として、審査員から高く評価された。一方、序論で提示した研究目的と齟齬を来したところもあるという指摘があった。

以上、本論文は、趣味縁の研究として、また街づくりとアートや市民参加の研究としても、理論的かつ実証的な貢献を果たしており、改善の余地はあるが、北海道大学において博士の学位を授与されるのに十分な業績であると審査員全員が一致して判断した。